２０年目の葉山

村山市立葉山中学校
学校だより
第９号
令和５年８月２４日

行事を通じて成長する２学期

校長　富 塚 義 幸

８月１８日（金）、２学期８６日間がスタートしました。始業式では、生徒の皆さんに「たくさんの行事（＝体験）を通じて成長し、より良い葉山中学校を創り上げること」を要望しました。そのためには、お互いのコミュニケーションが重要です。目と目で会話ができれば一番なのですが、“相手に伝わる言葉によるコミュニケーション”をまずは大切にしたいです。会話だけでなく、あいさつや感謝の言葉も人間関係をより豊かにします。夏休み中（８月１日）の山形新聞の記事は、言葉について深く考える機会を与えてくれました。紹介します。

『言葉を信じる』

いかに現代社会が人工知能の世界に突き進んでも、国や民族が異なっても、人は「言葉」を使って生きている。しかし慌ただしく時間に追われる時代の中で、ゆっくり「言葉」について考えることはあまりないのではないだろうか。例えば、人と人との関係が希薄になってきている中、「思いやる」（他人の身の上や心情を押し量って配慮するなどの意味）という言葉について、われわれはどれほど意識的に考えているだろうか。一編の詩を紹介したい。大正時代生まれの童話作家・新美南吉が綴ったものである。

大人が子供にいった ／ 「この美しい本を上げよう」と ／ 子供は喜んでたずねた
「いつくれるの」／ 大人「来年になったら」／ 子供は早く来年になればいいなと思った
しかし次の日本人がいった ／ 「もうこの本をあげないよ」 ／ 子供はそっと唇をかんだ
そして遠くの雲を見ていた ／ 大人はちょっとすまなく思った ／ しかし大人は考えた
「何も文句はないはずだ　何一つ損したわけじゃないのだから」
なるほど子供に文句はなかった ／ だが子供は何も損しなかっただろうか
人の言葉を信じるという ／ 尊い心をすこうしばかり ／ 子供は失いはしなかったろうか

ここに書かれた一見平易な言葉は実に繊細なものであり、作者の子供に対する「思いやり」ー深い博愛を感じる優れた詩である。私の机の上に、アフガニスタンで志半ばで銃弾に倒れた医師中村哲さんの本がある。本棚になかなか戻せずにいる一冊だ。その表紙に記された言葉は「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」である。これらの言葉を前にすると、沈黙し見詰めてしまう自分がいる。省みれば、そう言い切れるまでの確かな内容のある人生を自分はまだ送ることができていないと思う。軽い言葉ではない。重く深く尊い言葉である。（雲海 山人）

私にとって、大切な言葉は「ありがとう」です。８年前、父が病気で亡くなりました。亡くなるまでの数か月、本人の希望で在宅での看護となりました。思うように体が動かず、介護が必要になり、「なさけない」という父の言葉が増えていきました。家族も辛くなり、「周りの人は、なさけないことをしているとは思っていない」と話をしたところ、何かしてもらうと「ありがとう」が父の口癖となりました。とりわけ、『結婚してから今まで、父から一言も「ありがとう」と言ってもらったことがない』と話をしていた母は、『「ありがとう」の一言が、すごくうれしい』と毎日報告してくれました。父が亡くなった今も、我家では「ありがとう」が飛び交います。思いやりのある言葉や感謝の言葉にあふれた学校を目指していきたいです。

この夏の一枚：“カナダ・バリー市青少年訪問団との交流”

８月２３日（水）４校時、友好都市であるカナダ・バリー市の高校生９名と本校１３７名の交流会が行われました。最初は３年生だけの交流を予定していましたが、英語でのコミュニケーションを全校生が体験できる貴重な機会と考え、グループに分かれてのトークタイムを実施しました（訪問団の皆さんは戸惑ったかもしれません）。充実した時間を過ごすことができました。国際交流の意義を理解し、“地域の窓から世界を見つめる”きっかけになったのではないでしょうか。訪問団の皆さんは、午後からの「村山市中学校芸術鑑賞教室」にも一緒に参加しました。互いに手を振り合い・言葉を掛け合う姿が微笑ましく、他人とすぐに仲良くなれる能力（？）がうらやましかったです。とびっきりの笑顔をご覧ください。